

# 豊後國分寺跡

昭和50年度発掘調査概報

1976

大分市教育委員会

## 例 言

1. 本書は大分市教育委員会が国・県費の補助を得て実施した豊後国分寺跡緊急発掘調査の昭和50年度調査（第二次）の概報である。
2. 調査団の構成は次のとおりである。

**調査主体者** 大分市教育委員会

**豊後国分寺跡調査委員会委員** 池見 喬（大分市教育委員会教育長、調査団長） 渡辺澄夫（別府大学教授） 兼子俊一（大分大学講師） 岩男 順（大分大学教授） 中野幡能（県立芸術短大教授） 富来 隆（大分大学教授） 賀川光夫（別府大学教授） 沢村 仁（九州芸術工大教授） 小田富士雄（北九州市立博物館） 衛藤 久（県教育庁文化課長） 森信男（市教委社会教育課長）

**調査指導者** 沢村 仁・小田富士雄

**調査員** 後藤宗俊・真野和夫・渋谷忠章・藤田和夫（以上県文化課） 安部幸人・杉崎重臣・小野雅途・羽田野光洋（以上大分市教育委員会）

**調査補助員** 亀田修一（九州大学学生） 関尾 裕・平田豊弘 森 裕行・福島政文（以上別府大学学生） 他に大分大学歴史研究部の協力があった。

3. 本書の執筆は、沢村・小田委員の指導を得て後藤、真野、渋谷、藤田が分担し、編集は真野があたった。

## 序 文

豊後国分寺跡、発掘調査の第2年次調査を過日終了しました。

今年度の調査は49年度調査に引きつづき調査委員諸先生方はじめ、各位の指導を得てすすめられました。北方建物、回廊、南門地区等で数々の成果が得られました。

また調査区の大半が水田であるという事情がありましたが、地元土地所有者各位にはとくに調査の趣旨を理解され終始協力をいただきました。

今回の調査によって、寺域と主要伽藍の性格の確定にさらに大きく前進することができましたが、さらに未調査地区の調査をすすめる所期の目的を果したい所存です。

以下50年度調査の概要をまとめ報告いたします。

昭和51年3月

大分市教育委員会

教育長 池 見 喬

## I 調査にいたる経過

寺域と主要堂塔の遺存状況を確認し、将来における環境整備のための基礎資料を得ることを目的として着手された豊後国分寺跡の調査は、第1次の49年度調査に引きつづき、第2次調査が、昭和50年11月18日より51年2月19日にわたって実施された。

49年度調査の概要はすでに「豊後国分寺跡—昭和49年度発掘調査概報」として刊行済みである。この第1次調査は、20日程度の予備調査的なものであったが、その後の調査の方針をたてるうえで多くの成果を得た。

まず塔跡については、最も保存のよい遺構として知られるものであるが、この調査により、一辺18m前後の栗石積基壇をもつこと、初層の柱間は、脇の間13尺、中の間12尺（天平尺）のプランであるらしいこと等が知られた。

また薬師堂地区に遺存する22個の礎石群は、かねて金堂跡とされているところであるが、ここに、東西約32.5m、南北22mほどの版築を施した掘込み基壇が確認された。（以下、本文では薬師堂地区基壇という）この建物の南北方位は、塔跡のそれに合せて設定された調査基準線（N10°12'E）より西に4°45'ほど偏していることが知られた。

この建物の北方では、南より第1、第2、第3の建築遺構が確認された。第1遺構は、掘立柱の抜き跡らしき地点に瓦片の集積のみられる遺構であるが、建物としての確認はさらに拡大調査が必要とされた。第2遺構は、先の薬師堂地区の建物の基壇の中心より北60mの地点に発見された東西方向の石列を北縁とするものであり、根じめ石の遺存が認められた。この建物の規模については、東西、および南側が不明であり、次の調査を待つこととなった。

この建物の北方で発見された第3遺構は巾1mのトレンチで根石をかむ安定した礎石1個を確認したもので、北門跡等の遺構である可能性のつよいものであった。

この他、塔跡に対面する東側の畑において基壇の痕跡が発見された。

こうした中で、従来金堂として知られた薬師堂地区の建物が、伽藍の中核をなすものであることは確かとしても、それが金堂であるかどうかの決定は、その北方の第2遺構、および塔跡東側の基壇の痕跡等の全容の判明したうえで、これらとの関係のうえでなされる必要があるとされた。

遺物のうち、瓦については以前から現国分寺に所蔵されているものの他、特に新しい形式の出土はなかった。軒丸瓦は第1類（珠文縁複弁11葉）、第2類（単弁）、第3類（第2類の細弁化したもの）があげられた。

こうした成果をふまえ昭和50年度調査は、第1に西門地区における築地等の有無の確認、第2に北方地区の建物の性格の確定、第3に回廊の探索、さらに中門、南門の探索を主たる目的として、49年度調査とほぼ同陣容によって着手された。

## Ⅱ 調 査 の 概 要

### 1. 北地区第2遺構

第一次調査では、版築ならびに基壇北縁の東西方向の石列と2ヶ所の根じめ石が明らかにされた。またトレンチ東側でもボーリング探査によって、根じめ石がほぼ等間に確認され、そこが重要な建物遺構であることが推定されていた。

今回の調査では、この遺構の性格を明らかにすることを第一の目標として、B.M. 1より北に62mを最北とし、第一次調査のトレンチを含めた南北12.5m、東西16.7mの調査区を設定したが、南側には水路が走っているために、やや変則的な調査区の設定となった。

版築は黒色土を掘りこんで築成したものであるが、基壇北縁の石列より南側3mの間には認められなかった。

根じめ石は6ヶ所が確認され、版築の残存部では掘り方が認められた。調査区の東側に検出された根じめ石は、建物の東端に位置するものと考えられ、柱間の心々距離はそれぞれ約3mを測る。礫は安山岩の自然礫を主にして、一部には軽石質凝灰岩を利用している。

南西の根じめ石の南側には、瓦片が散乱した状態にあり、その根じめ石から東南の方向に、幅約30cmで瓦片と小石がまじって確認されたが、その下に掘りこみ等は認められなかった。

基壇北縁の石列は、部分的に欠落しているが、平坦部を外に向けて整然と並べられている。この石列の内側にそって、トレンチ設定基準線から約2mほど西に玉縁付丸瓦を6枚並べ、その上に平瓦を重ねた状態が検出された。また基準線より西7mにおいても、2枚の玉縁丸瓦が並んで発見された。

この基壇北縁部には東西3.2mの黒色土をやや固めて築成した張り出しがある。基壇端の石列に接して外に、石列の痕跡がみられ、さらにその石列の北1mには、径50cmと90cm大の石が90cmの間をもって据えられている。また張り出しの西端には礫の長軸を南北にして据えたものもあり、この張り出しは、階段状になっていた公算が強い。

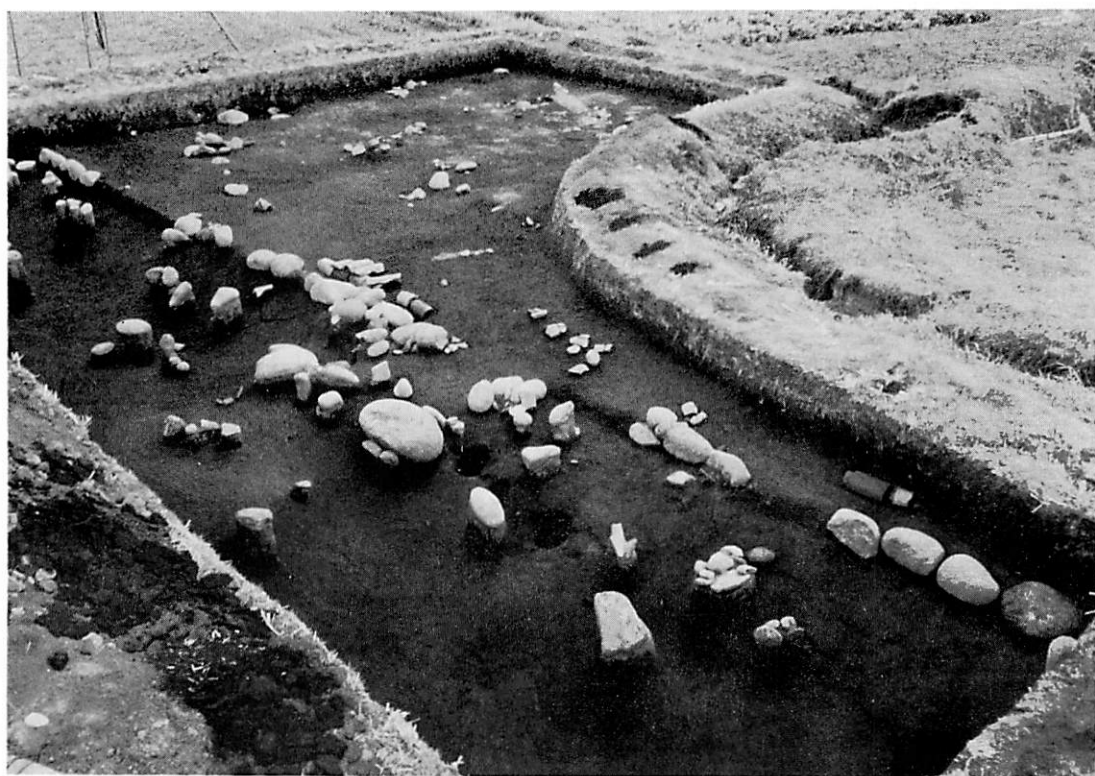
基壇西側の探索については、トレンチ設定基準線より西9m～11mの東西トレンチと、トレンチ西端3mから北に9mのT字形のトレンチを設定した。

このトレンチでは、北側のような石列、根じめ石は検出されなかったが基壇端の西側と南側の痕跡を示すと思われる巾1mの黄色土が帯状に検出された。

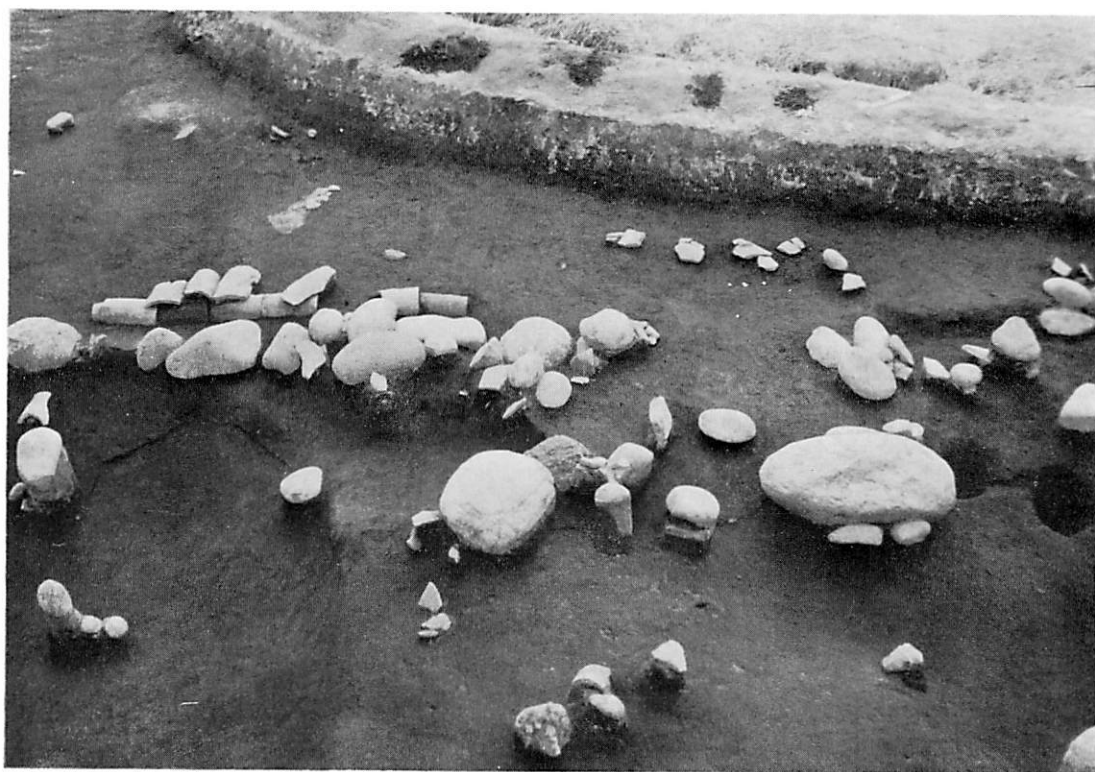
また、南側の基壇端は第一次調査の結果より薬師堂下基壇の北側基壇端より30mを測る。したがって、これによって想定される第二遺構の基壇の規模は東西28m、南北18mとなる。これに、根占め石等の状況からみて東西7間、南北四間の建物を想定して大過なからう。

今回の調査によって、この北地区第2遺構の規模、方位等をほぼ確認しえた。これによって、49年度調査で確認された薬師堂地区基壇の北側に、ほぼこれと対比しうる建物を確認しえたことになる。





北第2遺構全景（北西より）



基壇中央部の瓦積みと軒廊

## 2. 西地区土塁状遺構および溝遺構

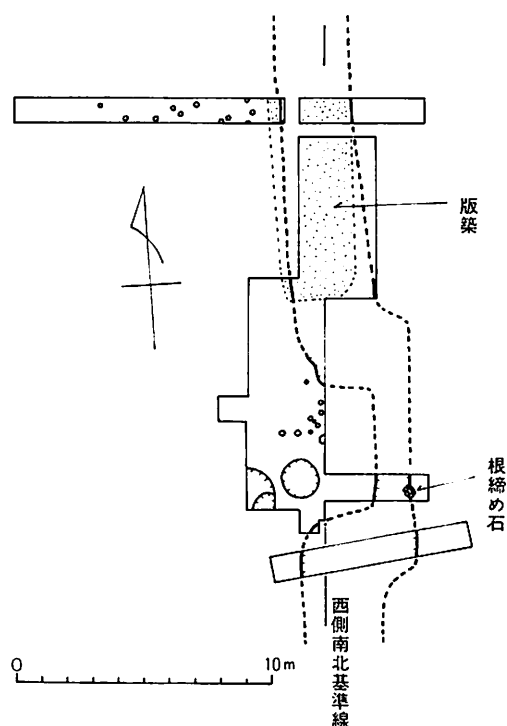
西地区の調査では、伽藍地西側を画するとみられる溝遺構およびこれに内接する土塁状遺構が発見されたのでこの遺構を南北に追跡した。その結果、南側で中門並行位置まで、北側で今回その規模が明らかとなった北第2遺構並行位置まで、距離にして約150mが確認された。溝はこれよりさらに北あるいは南へ延びるとみられるが今回は追跡を見合せた。

土塁状遺構は伽藍の推定中軸線からの距離約76mに内接してつくられており、地山を削り出しその上部に版築を施した幅約4.5～5mの土塁状をなし、西側に幅約4mの深い溝が並行している。土塁上面あるいは溝内から瓦が多数出土していることから、土塁上に瓦葺きの建築物があったことは確実とみられる。結論的には、今回の調査によって薬師堂地区基壇から東西にのびる回廊がこの土塁状遺構と塔との間で南北に抜けていないことが確かめられたので、北回廊はそのままこの土塁状遺構に連絡し、この土塁状遺構上の瓦葺きの建築物がすなわち西回廊となる可能性が強い。

なお、この西地区の調査は便宜上、現薬師堂南側を東西に走る道路を境いとして、北側を西第1地区、南側を西第2地区に分けた。

西第1地区では、土塁状基壇の東側が削り取られて約1.9mの段落ちとなって水田化しているため、溝遺構の追跡を主体に調査した。また、当初西門が推定された1～3トレンチは小形の柱穴群が検出されたが、遺物も少なく柱穴相互の関係もつかめていない。

溝遺構の追跡の結果、溝は薬師堂地区基壇と北第2遺構のほぼ中間地点並行位置で伽藍側すなわち東に「コ」字状張り出し部をもつことが判明した。この張り出し部で溝は幅を減じて約1.3m東に張り出している。張り出し部の長さは約10mある。この構造はおそらく門あるいは経楼・鐘楼などの建物の位置を示すものとみられるが、時間的制約から発掘区を拡張して遺構を明らかにするにはいたらなかった。また、幅のせまくなった溝上に半分かかる状態で根締石が発見されており、数次にわたる遺構の存在が予想される。



西第1地区溝遺構張り出し部概略図



西第1地区第1トレンチの柱穴群

さらにこの張り出し部のすぐ北側で溝上面を覆った版築が発見されており、溝が機能しなくなった段階でこの部分に建物を移動させた可能性も考えられる。この版築で覆われた溝中より、「右院」と読むことができる墨書銘のある土師器坏が発見されており、あるいはこれに関係する建物があったことも考えられよう。

一方、**西第2地区**では塔の西側に広い発掘区を設定して土塁状をなす基壇と溝の構造を調査するとともに、この土塁状造構と塔との間にはたして別個に回廊が存在するののかも探索した。この結果、塔とこの土塁状基壇の間に回廊が南北に走る可能性は、先述したとおり全くないことが判明した。

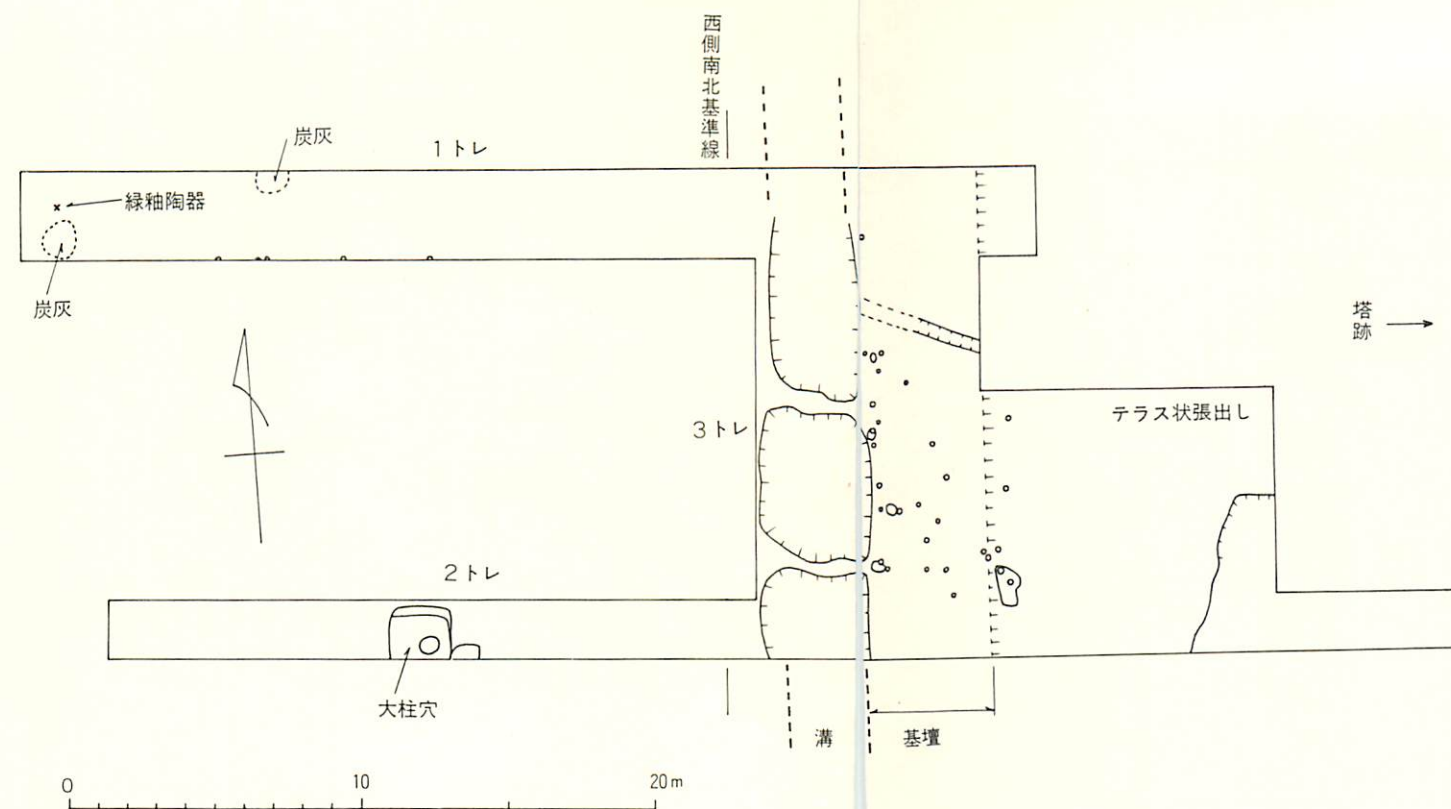
なお溝ではちょうど塔の西側に当たる位置に2個の仕切りを設けた特殊な構造が発見された。仕切りは地山を削出したもので二つの仕切りの中央部の地山部での間隔はおよそ5mある。仕切りの高さは遺存状態のよい北側のものからみて築地基壇分の高さにはほぼ一致する。溝中には平瓦・丸瓦がかなりまとまった状態で堆積しており完形品も多い。溝底のレベルは発掘で知り得た範囲では仕切られた部分が最も高く絶体高で30.05mある。これに対して西第1地区の北側において28.82m、西第2地区南側で28.71mとなるので、溝中の南北へそれぞれ排水されることになる。

基壇上面の幅は約4.5mあって、塔と中間地点の旧地表から測って、約1mの高さを有する。これは塔基壇の高さと大体等しい。基壇の塔側は緩斜面をなして一部テラス状に張り出したところがある。基壇上面には地山に掘り込んだほぼ3列の柱列群が検出された。

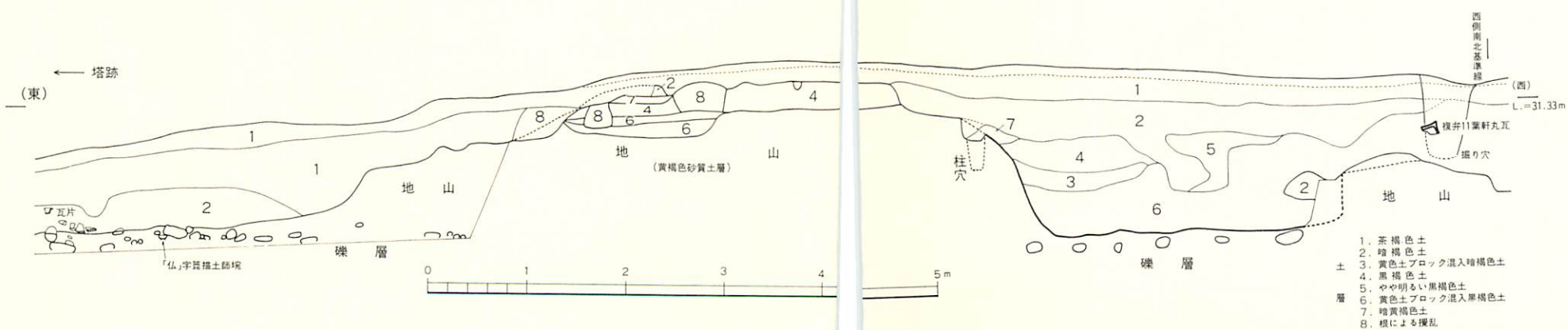
この柱列群は、直径20cm前後の小形のものがほとんどで、必ずしも3列が厳密に一直線上に並ばないなど回廊本体の柱穴と考えるにはやや問題が残る。したがって、これらの柱穴群は回廊本体を建築する際の足場構築に使われたものではないかと推定されている。

この地区から出土した遺物で注目すべきものは、緑釉陶器および墨書銘のある土師器壺形土器がある。出土位置は緑釉陶器が溝造構よりさらに西へ24mほどのところから単独で発見された。また、蔵骨器とみられる墨書銘のある壺は回廊基壇上の溝寄りの位置の表土下浅いところで発見されたものである。おそらく回廊崩壊後に埋置したものであろう。





西第2地区2~3トレ概略図



西第2地区2トレ南壁土層実測図



土塁状遺構・溝遺構全景（西南より）



溝遺構内瓦の出土状態（西より）

### 3. 回廊と中門の遺構

回廊の調査は、第1次調査の際に薬師堂地区基壇探索のトレンチ端に版築が存在したことが端緒となった。探索作業は、薬師堂の東西部分と、かつて礎石が出土した中門推定地およびその西側部分とに大きく分けられる。

薬師堂の東西に設定したトレンチ（1～3トレンチ）では、東側1・2トレンチにおいて掘込み地業の版築がみつかった。また、西側3トレンチでは伽藍中軸線に対してほぼ対称位置に地山を削り出した基壇を発見した。西側は水田化した際に削平を受けて地形が変化しており、検出した削り出し基壇がそのまま回廊基壇そのものであるかどうかは今後の調査でさらに検証する必要がある。

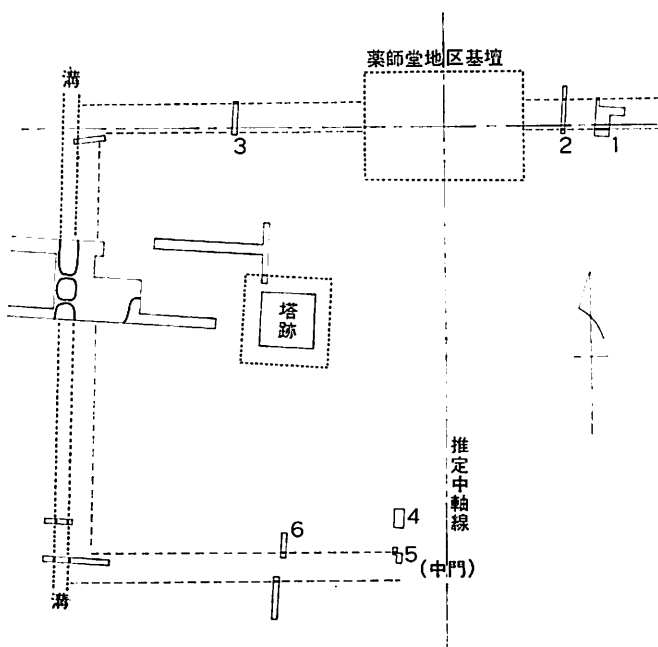
1・2トレンチは回廊の方向を調べるために7mの間隔で設定したものである。1次調査で判明した薬師堂地区基壇東辺からの距離はそれぞれ8m、14.4mの位置である。黒色土層を排除して地山まで達する掘り込みは底の平たい舟底状の形態で、深さ約70cm、幅は基底部で4.4m、地表付近で6mある。内部に施された版築はきわめて丁寧な仕事で固く叩きしめられている。版築内部から瓦片・釘などが発見された。

この掘込み基壇上に単廊を想定すると、薬師堂地区基壇の側面中央部にとりつくことが考えられる。

つぎに、中門推定地は、薬師堂地区の基壇中心から約95mの位置にある小さな納屋付近で、納屋をたてる際に礎石が発見されている。現況は薬師堂から南へ延びた市道が東から来た道路と三叉路を形成

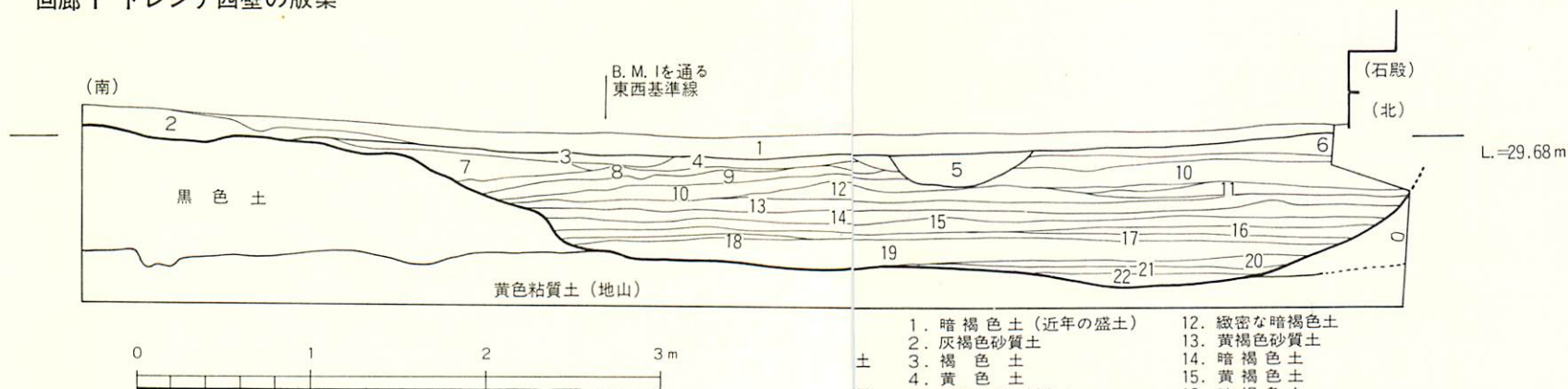
しており、もとは駄通りが西側の田へ続いていたという。礎石の発見された納屋は通りの交点の西南側に位置し、東側は密集した住宅地である。

発掘は納屋のすぐ北側に、水路・井戸跡を避けた小トレンチ（5トレ）を設定して行った。その結果、地山を削り出した基壇状遺構を発見した。基壇状をなす削り出し部分は現地表から約1mの深さがあり、その間に版

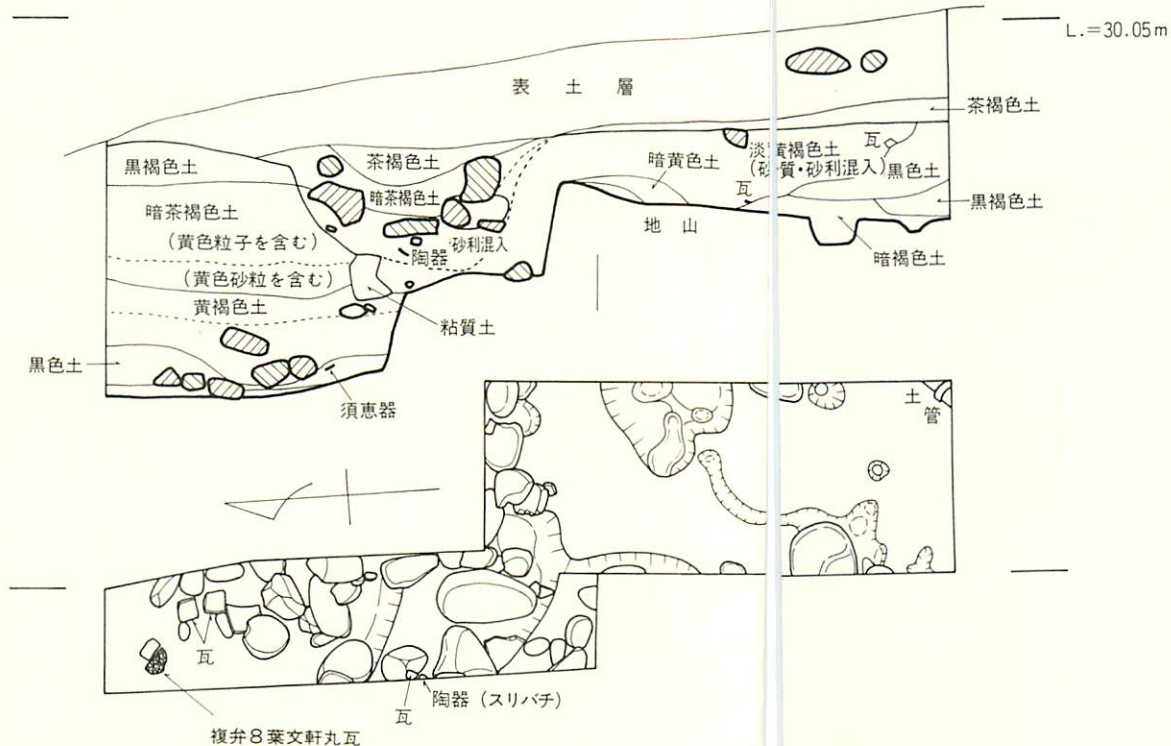


回廊調査関係トレンチ配置図

# 回廊 1 トレンチ西壁の版築



# 回廊 5 トレンチの削り出し基壇



回廊 トレンチ 実測図

築はみられない。削り出し部の北側には溝が存在する。溝底は基壇状部分の上面から1mの深さがある。基壇端は後世つくられた水路によって段状に改変されている。おそらくこの水路はかつて存在したという駄通りの側溝をなすものであろう。



中門地区の現状

この中門付近における基壇状遺構につづいて、西側でも

回廊基壇とみられる削り出し遺構が発見された。4トレンチから西へ25mの位置である。基壇幅は6m、北側および南側に地山をそれぞれ1.4m、1.2m掘り下げた深い溝がつく。基壇状部分で現地表から1mほどの深さがあるがその間に版築はみとめられない。

#### 4. 塔跡地区

現在観音堂が建っている塔跡は、第1次調査において西および南側基壇端が発見されれば次のようなことが明らかとなっている。

- ① 基壇の大きさは1辺約18m（60尺）。塔初層の1辺長は約11mとみられることから、軒の出は3.5mである。
- ② 基壇は約1mほど掘り込み地業を施した上を版築して築いたもので、高さは礎石の高さからみて約1mとみられる。
- ③ 基壇端の化粧は栗石積みによっている。基壇西側で3段ほど遺存していた。
- ④ 基壇外周は幅1mほどよく固められている。

今回の調査は基壇端の遺存状態を調査しつつ第1次調査の結果を検証する目的で進められた。トレンチは西端の礎石列を北側に延長した位置に長さ12.5m、幅1mで設定した。現状は塔跡基壇からみて比高約60cmほどの緩い斜面になっており、表土層は20～70cm程度昭和九年の火災後に運んだ瓦類が堆積している。これらを取り除くと、人頭大栗石を積んだ基壇端が良好な状態で遺存していた。西北隅礎石中心より測って3.5mの位置で前回の結果と変りがない。基壇石積みの外側は軟弱な黒色土を覆って暗褐色土の固められた層がある。

1次・2次調査を通じて基壇周囲に設けたトレンチからの瓦の出土量は膨大なものであるが、今回調査した基壇北側部分はとくに良好な状態で、石積みに密接して平瓦・丸瓦が





↑  
上層瓦の出土状態



←基壇積みと瓦の出土状態

重なって遺存していた。遺物では、完形となる扁行唐草文軒平瓦、珠文縁複弁11葉文軒丸瓦のほか、今回新しく均正唐草文軒平瓦（Ⅲ遺物 軒平・軒丸瓦拓影(14)）蓮弁が桃割れ状につくられた単弁軒丸瓦（同、(6)）などの資料を得た。

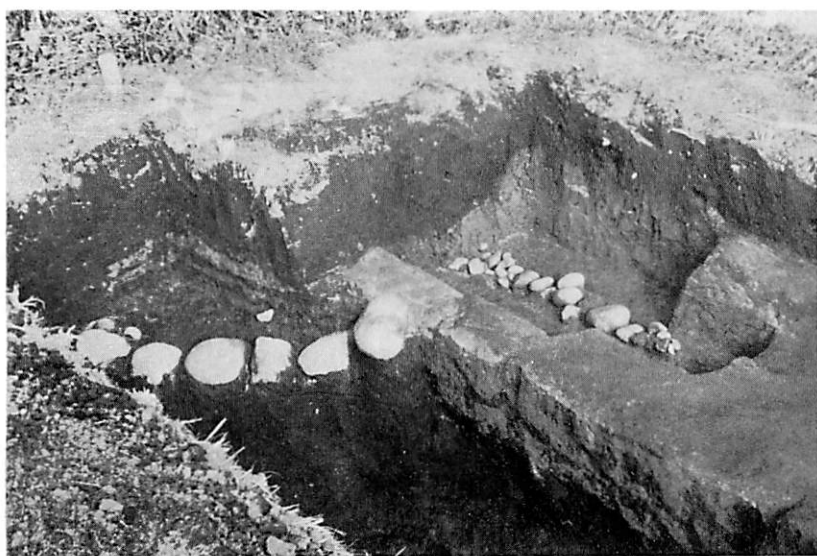
## 5. 南地区の遺構

薬師堂より南へ150 mほどのところに南門跡と言い伝えられる四辻がある。四辻の北東側はすでに宅地化しており、これを除く3方が水田である。四辻から北側へ設定した第1トレンチ(37m)と南へ設定した第2トレンチ(40m)を中心に調査を進めたところ、第1トレンチ北端で基壇の一部とみとめられる遺構をкаろうじて検出することができた。位置は薬師堂地区基壇の中心より測って約120 mのところである。

遺構は黒色土を約60cm掘り下げて版築を施した掘り込み基壇で、基壇裾に栗石列が遺存する。検出した栗石列はやや彎曲してN23°Wの方向を示して、次に述べる粘土層のところまで続いている。

版築部分の南側に接して黄茶色粘土を分厚くつき硬めた遺構が発見された。基壇から南へ5 mの間黒色土層を約35cm掘り込んで、そこに黄茶色粘土をつき硬めたもので、上面の高さは、基壇裾にあたる栗石列の高さに一致し内部には小礫をつめ込んだ南北方向の排水溝をもっている。粘土層は版築状をなすものではなくほぼ均質な層である。南側には表面の焼けたところがあった。排水溝内の礫に混って瓦質に近い焼成のスリパチ破片が発見された。このことからみて、この粘土をつき硬めた遺構は一応中世以後に構築されたものと考えられる。

さて、石列に囲まれた基壇とその南に接して発見された粘土遺構の性格については、遺構部分の発掘面積が小さいため現段階では断定することはできないが、版築部分については南門跡の南西隅とみるのが妥当であろう。また、版築部南側の粘土層については、東側への広がりがどこまでであるのか不明であるが、版築部が南門跡であるならば次の二つの場



南門推定遺構



南門推定遺構の掘込み基壇

合が考えられよう。

- ① 南門基壇前面の上り口を固めるために軟弱な黒色土を除去しておいた。
- ② 後世、門の移動あるいは別の建物の基礎の地固めとして行われた。

次に第2トレンチでは近世ないしは近代の溝遺構が発見された。場所は南門跡と伝えられる四辻に近いトレンチ北端部分で、西からの溝が直角に南側へ曲っていく状態がみられた。

これはトレンチと約1 mほどの間隔で存在する現在の南北排水路の旧状と考えられる遺構である。溝内は礫がかなり落ち込んでおり、これに混って磨白の破片や近世陶磁器の破片がみつかった。古瓦類はまったく発見されていない。

### III 遺 物

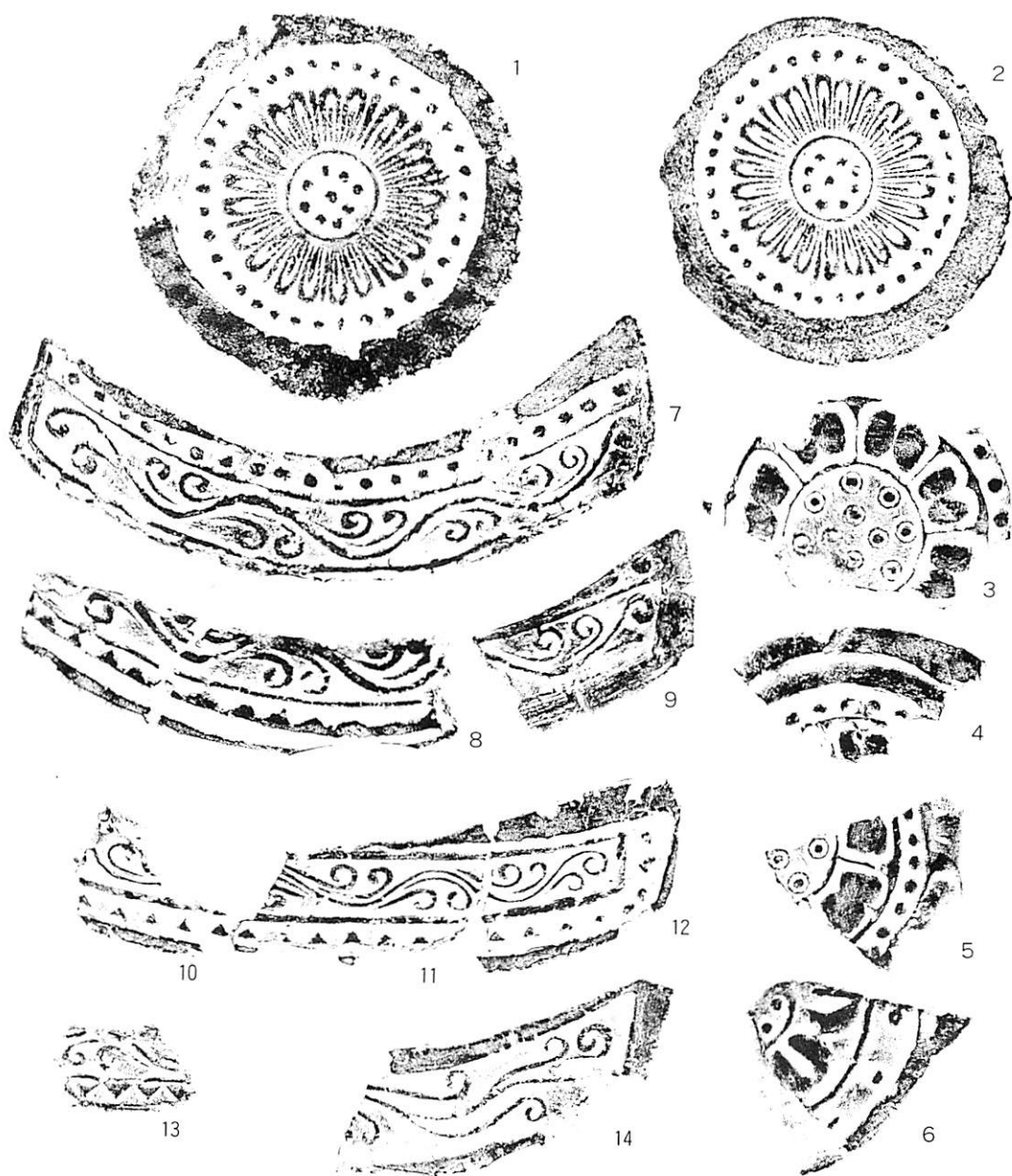
#### 1. 瓦

調査を通じて瓦類の出土は膨大な量にのぼっている。とくに塔跡、塔西側の南北溝中からは多量に発見され、このなかには完形の平瓦・丸瓦も含まれていた。

軒先瓦の資料は、第1次調査の資料および現国分寺の所蔵する資料のほかに今回軒平瓦・軒丸瓦ともに新資料が追加された。

軒丸瓦はつぎの五種類がある。

第1類（1・2）は珠文縁複弁11葉文の軒平瓦で、やや大きさを異にする二種類がある。



1・2・8・10・11・14 西第2地区 1トレ  
 3 回廊 5トレ  
 4・13 北第2遺構  
 5 回廊 1トレ  
 6・7・9・12 西第2地区 5トレ

軒丸・軒平瓦拓影

各遺構を通じて最も普遍的であり量も多い。直径は a (大) 16.5 cm、b (小) が 14.5 cm あり、中房には 1—8 の蓮子を配する。

第 2 類 (15) は今回出土していない。単弁の大形瓦で復原径約 20 cm。中房は 1—8 の蓮子をもつ。蓮弁の周囲には蓮弁と蓮弁の間に 1 個あて珠文を配し、その外側に界線をめぐらす。

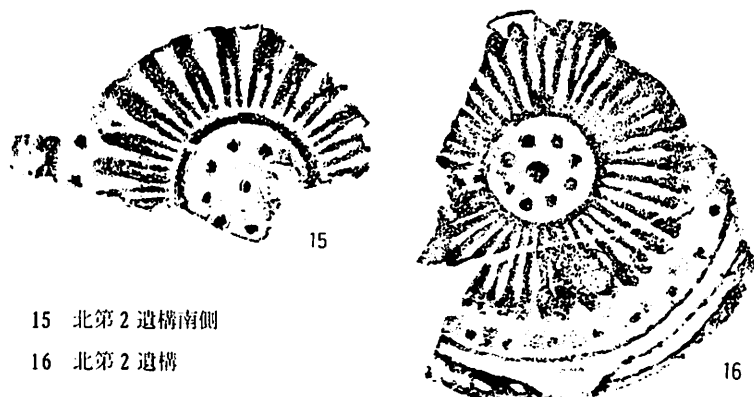
第 3 類 (16) も今回の調査では発見されていない。第 2 類をさらに細弁化したもので復原径は約 19.5 cm。蓮子の配置は 1—8、蓮弁は 42 を数える。

第 4 類 (3・4・5) は珠文縁複弁 8 葉文の軒丸瓦である。今回、回廊および中門付近、北第 2 遺構などから数点発見された。5.8 cm の大形の中房には、円圈のある蓮子を 0—4—8 と配置し、個々の蓮弁をあらわす輪郭線が花卉全体を縁どる圈線となって肉太く表現され、なかに楕円形の盛り上りのある素弁をもつ。子葉は形からとりはずした後に圧迫を受けて扁平となったものが多い。外縁には太い珠文を密にめぐらし、縁の幅のとくに広いものがある。復原径約 17 cm。平安初期のものと考えられる。

第 5 類 (6) は復原すると 7 葉文となる単弁軒丸瓦である。塔跡より 1 点出土した。盛りあがり少なく丸みのある素弁はいわゆる桃割れ状に中央部が凹んでいる。周縁には珠文をやや粗にめぐらしている。復原径 17.5 cm。平安時代中ごろのものであろう。

これに対し軒平瓦は文様上つぎの二種に大別される。

第 1 類扁行唐草文軒平瓦は、太宰府系老司式軒平瓦の系統を引くもので、第 1 次調査で得た資料のほかに細部を異にする 2 資料の発見があった。便宜上、a・b・c と称する。a (7・8・9) は最も一般的にみられるもので、内区に右行する扁行唐草文を描き、上外区に珠文、下外区および脇区に内区に向いた陽起鋸歯文を配している。唐草文は右端の支葉が、蕨手状にならず子葉の表現となる。瓦当面幅 27 cm。顎の形態は段顎となる。范型のずれたものが多い。b (10・11・12) は同じく右行する唐草文を描いたものであるが、文様全体が a に比べ繊細になっており、外区上縁の珠文を欠いている。唐草文の形態も左右両

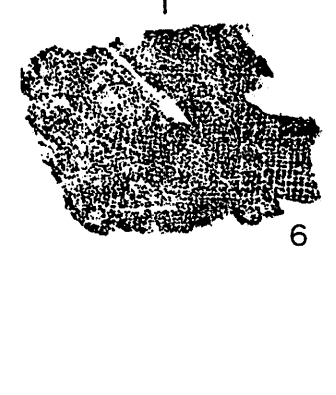
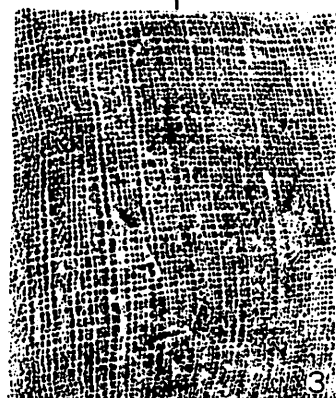


15 北第 2 遺構南側

16 北第 2 遺構

昭和 49 年度調査出土軒丸瓦





平瓦拓影

端部に相違がみられる。直線額で彎曲度の小さい瓦である。C (13) はごく小破片1点のみの出土であるが、明らかに左行する唐草文と下向きの陽起鋸歯文が観察され、以上3種のうちでは最も祖型に近いと思われるものである。北第2遺構から出土した。

第2類 (14) は均正唐草文軒平瓦で、現国分寺の所蔵品のなかにもみられる。塔跡から1点出土した。曲線額。平安時代に下るころの製作であろう。

瓦の成形技法について調査中注意にのぼった点を2～3記すならば、まず叩きの種類では、

- ① 縄目叩き……………1、2
- ② 格子目叩き（大・小）……4、5
- ③ その他の叩き……3、6

に分けられる。③のなかには、波状叩きや格子のなかをさらに対角線を結んだ形のものなどがある。いうまでもなく①および②が圧倒的な割合を占めており、平瓦の場合縄目叩きはなで消されることがある。丸瓦ではすべて凸面は丁寧になで消しされているが、③の叩きは使用されていないようである。また叩きではないが、平瓦凸面に布目のあるものが数点出土しており注目される。

平瓦凹面の仕上げについては、

- ① 布目のままのもの……………3
- ② 布目の上に全面あらいカキ目の入るもの
- ③ カキ目ののちなで仕上げをほどこすもの……………1・2・4・5

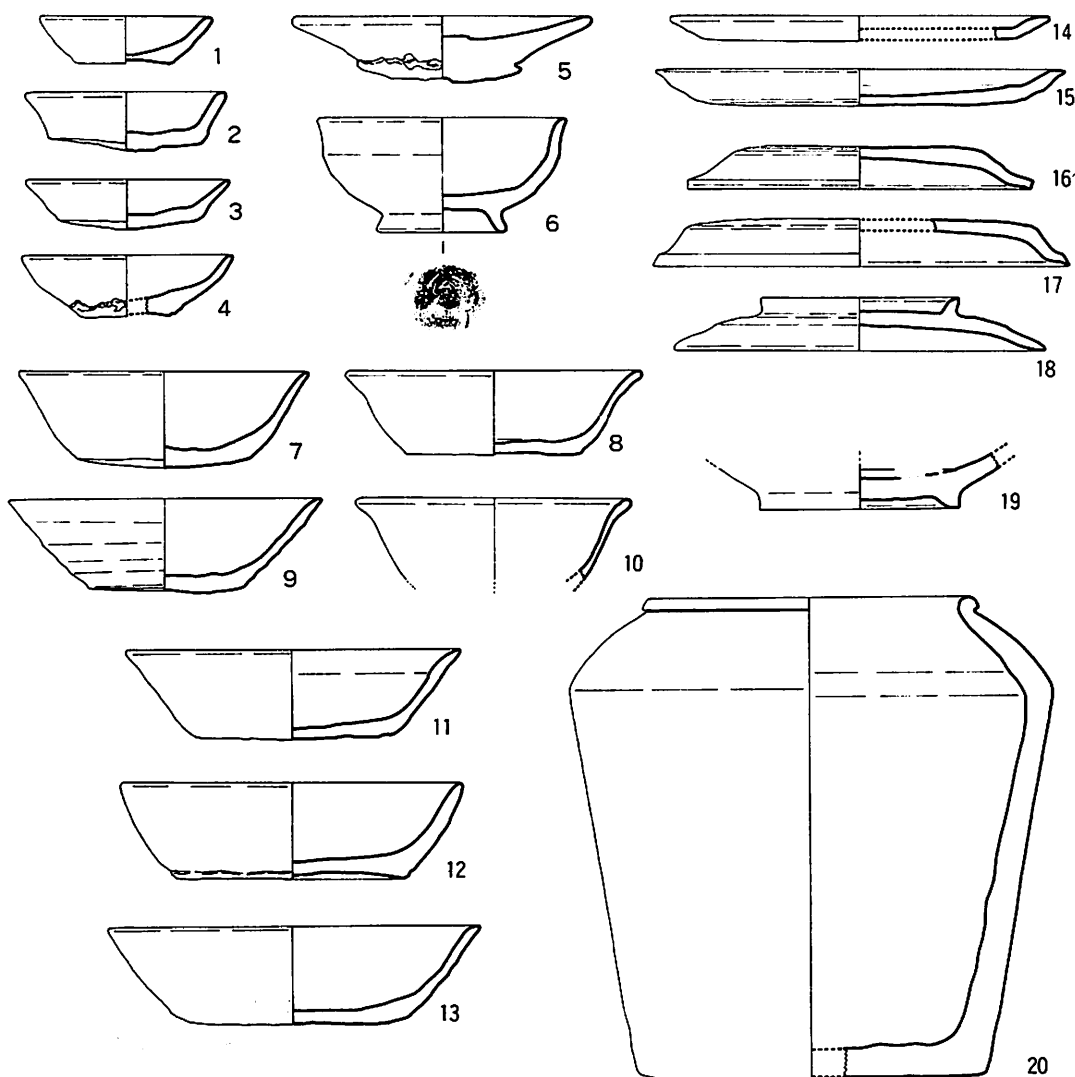
の別がある。このうち、③には平瓦下半部のみ行うもの、すなわち屋上に重ねたとき表面に出る部分のみなで仕上げしたもの（1・2・5）と、中央部の最も凹んだ部分のみ上から下までなで仕上げしたもの（4）とがある。これらは表面を緻密に仕上げ雨水の流れをよくする効果的手法である。

## 2. 土 器

出土した土器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器・ごく小数の青磁など輸入陶磁器類・中世～近代にいたる国産陶磁器類がある。この中でも器形のわかるものでは土師器類が圧倒的多数を占めているが、墨書銘のある土師器2点が発見されたことは特筆すべきことであった。今回実測図をかかげたものは代表的形態の土師器（皿・碗・坏・蓋・壺）と緑釉陶器である。

小形皿形土器（1～4）は直径7～8cm前後のもので、内面に煤が付着し灯明皿として使用されたものである。このうち（1）は糸切底である。（5）はやや大形で形態を異にするが同様な用途に用いるものであろう。内面中央部には体部→口縁を回転を利用したなでを施した際の円形の低い段があり、底部のなでつけは粗雑である。

碗（6）は付高台内側に「仏」字の篋描がある。丸みのある体部は口縁近くでカーブを



- |               |           |
|---------------|-----------|
| 1・11・12・16・20 | 西第2地区 3トレ |
| 2・3・15        | 西第2地区 5トレ |
| 4・14・17       | 北第2遺構     |
| 5             | 西第1地区 9トレ |
| 6・7           | 西第2地区 2トレ |
| 8             | 西第1地区 8トレ |
| 9・10・13       | 西第1地区 7トレ |
| 18            | 西第1地区 5トレ |
| 19            | 西第2地区 1トレ |

土 器 実 測 図

かえて鈍い稜がつき、内彎気味に立ち上る特徴をもっている。胎土には砂粒が多い。塔の西側土塁状遺構のやや内側で出土した。平安時代中ごろのものであろう。

坏（7～13）は成形技法および形態によっておよそ3種類に分類される。まず（13）を代表例とする底部径が大きく斜上方に直線的な体部～口縁部を形成するもの（7・9・11・13）。このうち（13）は底部に「右院」と読める墨書銘のある土器であるが内外面とも丁寧なへら磨きが施されている。（7・9・11）はロクロの回転を利用したなで仕上げで、底部はなでを行う。つぎに、（8・10）のグループは体部～口縁部の形態が曲線となる特徴をもつ。体部～口縁部の仕上げはロクロの回転を利用したなでである。最後は（12）を代表例とする糸切底をもつグループである。使用された年代からすれば（13）のごときタイプをより古式において、（8・10）のタイプとなる時期を平安時代中ごろ以後と考える。

皿（14・15）は口径16cm前後をはかる浅い形態のものである。塔跡トレンチから出土した（15）は内面に非常に粗なウズ状のへら磨きを施している。

蓋（16～18）は皿形品との見分けが非常に難しいものがあるが、口縁部の形態、表裏の仕上げ手法などにより一応蓋としてとりあげたものである。

緑釉陶器（19）は、高台のつく底部のみの出土で、須恵器に緑釉を施した明るい鮮緑色の色調である。

壺（20）は精選された胎土の土師器で、経文の一部とみられる墨書銘が側面にあり、おそらく蔵骨器と考えられるものである。口径12cm、高さ19cm。書体からみて室町時代ごろのものと推定されている。内容の一部を次に記す。

□ 来 無 東 □

三 界 如 □ □

一 心 之 本 □

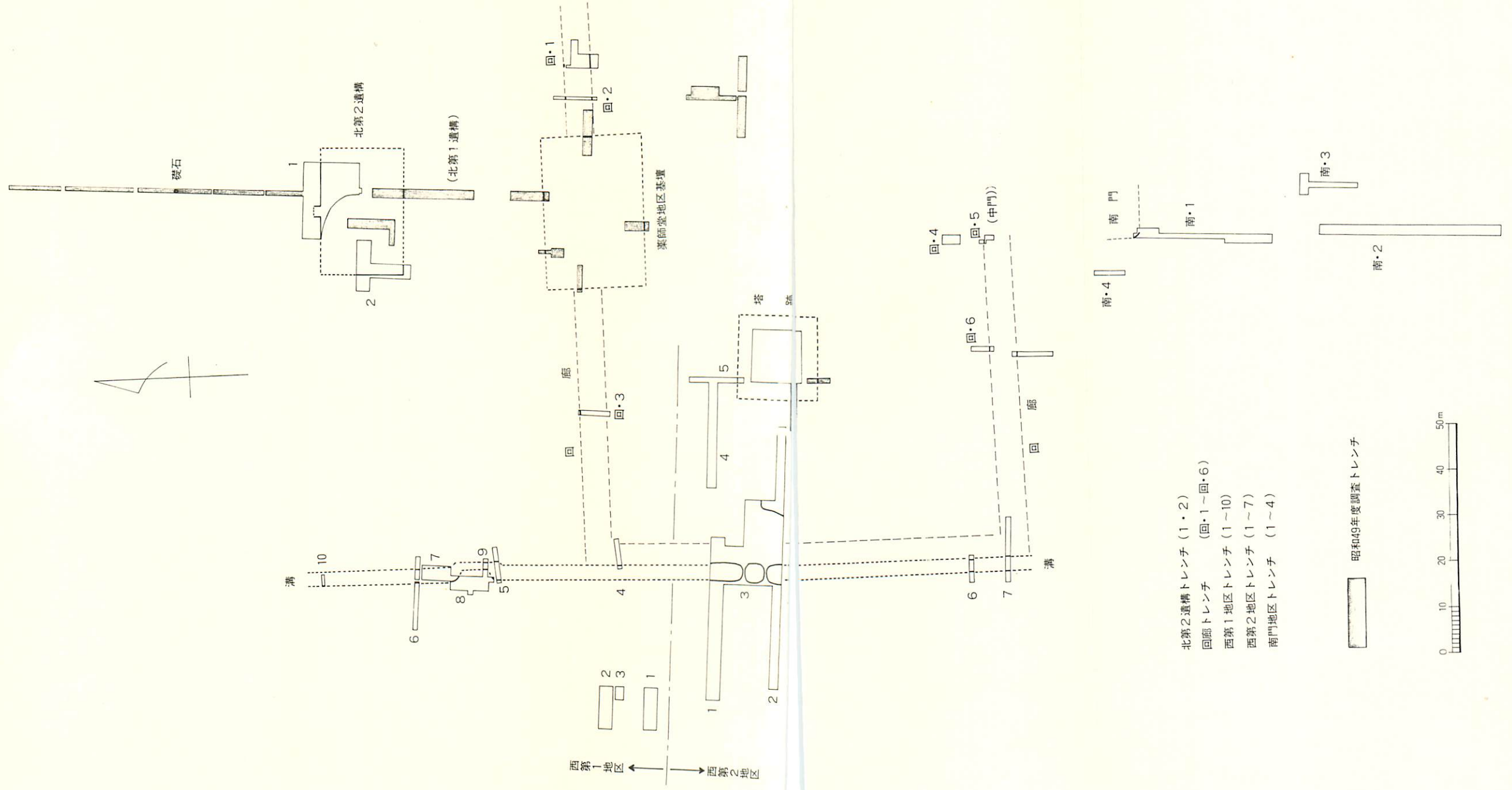
□ □ 南 北

□ 妙 法 蓮

華 経

□ □ 三 界 成

豊後国分寺跡昭和50年度調査概略 図





## IV ま と め

今回の調査は国分寺の中核となる堂塔の発掘と合わせて、西地区における寺域の追究に主眼をおいたものであった。

主要堂塔の調査では、第1次調査でその存在が知られた北第2遺構の規模が判明し、薬師堂地区基壇遺構・塔跡につづいて、中心伽藍の様子が一層明らかとなった。さらに、西地区の調査で発見された南北150mにおよぶ溝は伽藍域を画する遺構と考えられ、南門跡とみられる遺構とともに寺域を解明する重要な手掛りを得た。ここで簡単に1次・2次の調査結果をまとめてみよう。

1. 現薬師堂地区には東西約32.5m、南北約22mの規模で基壇下の掘込み地業がなされている（薬師堂地区基壇）。
2. 1の北方約30mの距離に東西約28m、南北約19mの基壇が存在する（北第2遺構）。
3. 1と2の間には北第1遺構とよぶ柱の抜き跡状の不明遺構があり、2の北方約30m付近に礎石（1個確認）が存在する（北第3遺構）。
4. 塔跡は1辺18mの基壇で、基壇周囲の化粧は栗石積み、安定した礎石の配置から推定される南北方向方位はN14°Eである。
5. 回廊は薬師堂地区堂宇の中央部にとりつき塔をとりかこむ形となる。想定中軸線から西側までの距離は約75m（250尺）、薬師堂地区堂宇の中心から推定中門位置までの距離は約90m（300尺）である。
6. 西側回廊に接して大溝が南北方向に存在する。この溝は北回廊のとりつく地点よりさらに北に伸びて第2遺構並行位置付近で「コ」字状張り出しがある。この溝遺構は伽藍域を示すと考えられる。
7. 南門跡とみられる遺構の一部が調査され、薬師堂地区堂宇の中心から約120m（400尺）の位置にはほぼ内接する。
8. 回廊にとり囲まれる塔の対称位置（即ち薬師堂地区堂宇の東南の位置）には薄い版築の残存がみられるがその規模や性格についてはいまだ不明な点が多い。
9. 瓦・土器などの遺物からみると、平安後期の年代を示す遺物はほとんどみられずこの頃にはすでに荒廃していたことが考えられる。

---

---

豊 後 国 分 寺 跡

昭和50年度発掘調査概報

昭和51年3月31日

発 行 大 分 市 教 育 委 員 会

大分市今津留 1213—179

印 刷 明 治 印 刷 K K

---

---